

赤木桁平

「遊蕩文学」の撲滅

「遊蕩文学」の撲滅

精神的文明の頽廢と糜爛びらんとに促されて、徳川幕府の中葉以後現れ初めた文学上の一傾向であるが、我国の文壇には、予の自ら呼んで以て「遊蕩文学」となすところのものが、久しい間非常な勢力を揮っていた。現に明治期の事實に照して見ても、硯友社一派の文学のごときは、その本質に於いて、多く「遊蕩文学」の域を去るものではなかつた。然るに日露戦役以後、自然主義の勃興につ

れて、芸術に対する新しい自覚が吾々の意識に上り初めてから以来、漸く文壇の一角にのみ残喘ざんぜんを保っていた、斯くのごとき文学的傾向が、最近に至って再び文壇一般の人氣に投じ、且つ、かかる作品を創作する作家が、最も世俗的意味のポピュラリチーを博せんとするの傾向あるを示している。

果して然らば、予の所謂「遊蕩文学」とは抑そもそも如何なるものか。——この疑問に対して適宜の解釈と説明とを与えることは、国家の芸術的発達に対して常に真面目な考慮と研究とを怠らない人士に向つて、所謂「遊蕩文

学」の本質に関する徹底した知見と評価とを与えることであり、兼ねて斯くのごとき文学的傾向が最近に至って漸次その勢力を増進しつつありという事実が果して欣ぶべきか否かという問題に就いての誠実なる考究を強要することでもある。この意味に於いて、予は以下すこしく詳細なる説叙を費して見たいと思う。

二

予の呼んで以て「遊蕩文学」となすところのものは、

主として遊里に於ける“Saufen und Huren”（ドイツに於ける某文学史家の語、適切なる訳語なきが故に、姑しばらく原語のまま襲用す。）を中心とした人間生活——言葉を換えて云うと、人間の遊蕩生活に纏絡てんらくする事実と感情とに重きを置いて、人性の本能的方面に於ける放縱淫逸なる暗黒面を主題とし、好んで荒色耽酒の惑溺境を描出せんとするものである。従つて「遊蕩文学」の徒が慣用する芸術的境地は、常に酒楼と娼婦とにいによう圍繞せられた淫華狂噪の世界であつて、吾人の実生活を経緯する大部分の境涯、即ち、静謐なる感情と冷徹なる理知とに依つて司

配せられた生活に至っては、彼等の殆ど一顧をだに払うを快しとしないところである。

蓋し、彼等「遊蕩文学」の徒の根本的態度に於いて著しく看取せられる特徴は、彼等が一樣に人間生活に於ける“Saufen und Huren”の一面にのみ興味（乃至価値）を感じ、大体に於てかかる生活を肯定しようとする意思を暗示するところにある。否、たとい仮令肯定しないまでも兎に角“Saufen und Huren”に人間生活に於ける最も重大なる意義を発見しようとし、“Saufen und Huren”の生活に従属する総ての生活情調に陶醉して、あくまで人間の理

知若しくは意思によって統整せられる生活を蔑視しようとするところにある。この意味に於いて、彼等の根本的態度を律する人生觀的傾向は、概ね現世的（彼等自身は現實的と云うを欲するであろうが、決して現實的とは云えない。）であり、主情的であり、享樂的であり、頹廢的である。

然のみならず、かくのごとき彼等の人生觀的傾向は、内部生命の必然なる要求にはぐく瞬はぐくまれた誠実なる體驗と精到なる思索との修練を經由したる生活經驗の所産ではなくて、多くは個人の氣質に培われた趣味性の発露たるに

過ぎないから、嚴密なる意味に於いて、「彼等自身のもの」ではない。——彼等の文学が概ね輕佻浮華の色を帯び、芸術の本質を閑却して、常に彫琢の末技をのみ趁おわんとするの傾向を有するのは、全くこの原因に基くものである。

しかも「遊蕩文学」の徒が心竊かに得意とする彫琢粉飾の技に於いても、彼等の有する技巧は単に形式外容の糊塗に過ぎないものが多く、従つて、創作せられたものの有する美しさは、本質そのものに何等の根差しもない形態上の美感に留まっている。この種の形態上の美感は、

彼等の描出する "Saufen und Huren" の趣味生活をして、益々鼻持ちのならない醜悪にまで近邇せしめるのみであつて、芸術的には何等の効果をも創出していない、最も適切な、最も具体的な比喻を借りれば、「遊蕩文学」の有する美しさは、徹頭徹尾娼婦の有する美しさに依つて象徴せられている。

三

上述のごとく、予の所謂「遊蕩文学」は、等しく "Saufen

und Huren”の生活を肯定的に描出するものではあるが、人生に対する真面目な懷疑と苦悶との洗礼によつて見出された最後の誠実なる「信仰」を告白するものではないから、かのオスカー・ワイルド一流の享樂主義の文学とは、全然その本質を異にしている。言葉を換えて云うと、前者の享樂的態度は単なる趣味生活の所産であるが、後者の享樂的態度はあくまで信仰生活の結果である。従つて、後者を代表する作品が、多くその主觀的背景に沈痛なる悲調を潜め、惻々として人を動かすだけの力を有するのに反し、前者を代表する作品を彩るものは、概ね浮

つ調子のけばけばしさに過ぎない。「通」と呼び、「粹」と称する浅薄なる人間生活の技巧化が、洗鍊ややされた人間生活の芸術化と同視せられて、動ほしもすると、不合理なる跋扈を恣ほしいままにするのも後者の世界である。

また、「遊蕩文学」はその描かんとするところの“Saufen und Huren”の生活を以て、人間生活の眞実なる一面なることを主張せんがために、自家の偏執なる主観を交えず、あくまで純粹客観の立場に終始して、人間生活の暗黒面をその細微に互って披発しようとするものではなく、その“Saufen und Huren”の生活中に自己を没入し

て、あくまで特趣の生活情調を楽しもうとするものであるから、かの自然主義文学に依って示された芸術的境地よりも異なっている。従って、われわれが自然主義文学に依って屢々教えられるごとき、人生に対する深刻なる批判なり評価なりを、到底前者の芸術的境地から汲み取ることとは出来ない。況んや前者の芸術的境地は与えられたる人生を生々しき現実 に於いて凝視するよりも、寧ろ一種の回避的態度に依って、これを朦朧たる意識の裡に誤魔化し去ろうとするのであるから、人生の真実味に根差したものと云っては、殆んど何物をも見出すことは出

来ない。予が如是文学的傾向を説明して、既に「現実的ではない。現世的である。」と断つて置いたのは、全くこの点を意味したものである。されば、自然主義勃興當時、一派の批評家等が、動もすると、西鶴とモーパッサンとを同列に置いて論じようとしたことなどは、勿論彼等の浅見と没理解とを曝露したものに過ぎない。

また「遊蕩文学」は好んで人生の表裏に纏絡する生活情調を描こうとはするが、その生活情調に一種の「哲学」を見出し、その「哲学」によって、あらゆる人生現象を解釈し去ろうとするものではないから、最近のウィーン

文学などに於いて見られるような所謂情調芸術とも異つてゐる。殊に「遊蕩文学」の徒が読者の低劣なる興味に迎合せんがため、わざわざ猥穢わいあいなる衝動的事物を描出する点に至つては、芸術家としての彼等が有する見識は、昔時帳中秘戯の細写を職業とした春本作者のそれと、その間に何等の軒輊けんちするところもない。試みに、坊間流布の春本と、戯作者の作と、シュニツレルのある作とを比較せよ。蓋し、思い半ばに過ぎるものがあるう。

要するに「遊蕩文学」の本質というべきものは、前三者の欠点乃至弊所の集団であつて、その中に幾分たりと

も芸術的のものがあれば、それは一種の詩的情調である。しかも、その詩的情調たるや、単に語彙句法の彫琢と、感傷咏嘆の濫費とによつて捻出せられたものであるから、深く人間の内部生命に滲徹して、沁々吾人を動かすに足るだけの尖鋭なる力もなければ、また放縦なる空想を駆使して、全く現実の人間生活を忘却せしめるに足るだけの魅力もなく、ただわづか纒わづかに婦人小児の涙を促す安価なる感激と、俗物愚衆の興味を唆る低劣なる情緒とを有するばかりである。蓋し、この種の文学が屢々通俗的勢力を得るに至るとともに、また世道人心に著しき影響

を及ぼす所以のものは、全くこの点に存しているのである。

四

予の「遊蕩文学」に対する一般概念に就いての説明は、以上の叙述に於いて略々^{ほほ}尽していると思うが、然らばこの一文の冒頭に於いて、予が明言して最近の「遊蕩文学」を代表する作家は、果して如何なる人々であろうか。

——この疑問とともに、直に予の脳裏に浮かび出ずるも

のは、長田幹彦、吉井勇、久保田万太郎、後藤末雄、近松秋江諸氏の名である。その他の屑々たる徒輩に至つては、わざわざ茲こゝに列挙するほどの必要もあるまい。

これら諸氏の作品が、その内容形式に多少の差違こそあれ、大体に於いて、予の所謂「遊蕩文学」の範囲を出でないことは、平生氏等の作品に親しみ、且つ、上述の詳細なる予の説明を理解している人ならば、何人と雖も、直に承認するであろう。實際氏等の描くところは、殆ど遊冶郎ゆうやろうと醜業婦との間に於ける "Saufen und Huren" を中心とした生活であつて、それらの作品に芸術的価値の

著しく稀薄なることは、一般の「遊蕩文学」に就いて予
 が縷述した通りである。然るに氏等は文壇の一角に幡居
 して有力なる地歩を有するばかりでなく、最近の傾向か
 ら察すると、寧ろ文壇の通俗的勢力に於いては、到底他
 の諸作家が企て及ばないほどの強味を有している。現に、
 道途どうと伝うるごとくんば、長田幹彦氏は一般読書界から最
 も歓迎せられる作家であり、また吉井勇氏の歌集は、晶
 子女史を除き現代歌人の歌集中最も売れ行き宜きもので
 あるというのを見ても、充分這般しゃはんの消息を覗うことが出
 来る。若し夫れ近松秋江氏の作品に於けるがごとき低劣

なる乞食文学が、猶お五版十版と版を重ねつつあるというに至っては、文壇の好尚果して那边にまで墮するか。前途を思うと、坐ろに空恐ろしい感がある。

殊に最近文壇の実状に照して見ても、これまで比較的眞面目な作家、比較的芸術家らしい作家として認められていた人々が、一面「遊蕩文学」的作家として、その節操を二三にしつつあるの事実が現われている。これは素より彼等の有する芸術的良心の脆弱なことや、芸術的才分の貧寒なことにも由るであろうが、その原因の一半は、慥に生活上の経済的圧迫に強いられて、むしろ一般の好

尚に迎合すべく、通俗的方面に最後の活路を見出そうとするところにあるう。この事実などは明かに「遊蕩文学」の悪影響を立証するものであつて、善芸術の健全なる発達と繁栄とを祈念するものにとつては、軽々しく看過しがたい重大問題である。この意味に於いて、文壇に於ける「遊蕩文学」の存在は、恰も「獅子身中の虫」といふべきものである。

五

「遊蕩文学」の作家として見るべき近松、後藤両氏の作品に就いては、予が既にその無価値と無意義とを幾度となく反覆力説した通りであつて、今更かれこれいうだけの余裕も興味も持たないが、爾余の諸氏、即ち長田幹彦、吉井勇、久保田万太郎諸氏の作品に就いては、この機会を利用して、極く簡単に予の見るところを語って置きたいと思う。

長田幹彦の作品は、氏が始めて文壇に紹介せられた當時のものこそ、さすが 眞に純真なる芸術的感激の産物たることを示したのもあるが、爾後氏が文壇の流行児として

一般読書界の人気を博するに至ってよりのものは、殆んどそのすべてが売文工匠の手になった贗造芸術たるを思わすものばかりであって、近松氏の作品とともに、わが文壇に於ける典型的な「遊蕩文学」である。従って氏の作品も、また近松氏のそれに於けるが如く、単に実在の形式にのみ跪^{きはい}拝する幼稚なセンチメンタリズムと、生命の外容にのみ憧憬する劣等なロマンチズムとの所産であって、到底高等な芸術批評の享受に均霑^{きんてん}さるべき性質のものではない。殊に低級読者の至大な喝采を博しつつありという氏一流の纖軟柔麗なる筆致の如きも、これま

た近松氏の慣用する俗悪下凡の鶴ぬえ的技巧と相距ること五十歩百歩の代物であるのを見ると、仮令その間に如何なる理由が介在するにしても、氏が獲得したる今日の文壇的地位は、兎に角奇怪事だと評するの他はない。惟おもうに、氏のごとき作家は最早高級なる文学界に首を突込んで、かれこれ芸術家並の口を利くべき柄ではあるまい。寧ろ従順に、且つ謙虚に、所謂通俗小説家等の世界に退いて、せつせと金儲け大切と心掛けるのを得策とするであらう。予は、文壇のため、また氏自身のために、敢てこれだけのことを勧告して置く。

「遊蕩文学」の作家の一人として、予が吉井勇氏の名を挙げたのは、戯曲家としての氏に対してよりも、むしろ歌人としての氏に対してである。今更説明するまでもなく、氏の短歌は遊蕩児の生活と感情とを、浮華な、げんこ街誇な、繊麗な文句を以て歌ったもので、形式に於いては、兎に角抒情詩であろうが、内容に於いては、ただ浅薄な感傷と憂悶とがあるだけである。尤も氏の短歌には、前掲両氏の作品に於けるがごとき一種の卑俗と嫌味とが乏しく、且つ、作歌の技巧に氏の天分に具わる一種の巧緻が存してはいるが、その内容の空疎にして、その態度の

浮華なる、到底「遊蕩文学」の範囲を出でない。これは余談であるが、予は人ごとながら、いい年齢をして、「紅燈行」だとか、「柳橋竹枝」だとか、「芳町哀歌」だとかいうような、たわいもない、脂肪ざかりの少年でも云いそうなことが、いつまでもよく云っていられるものだと思う。

最後に久保田万太郎氏に就いて、一言を付け加える。氏の作品はこの種の作品中にあつて、比較的粉膩ふんじの厭いとうべき匂いが乏しく、且つ、色気と銜気との紛々はいだつを擺脫しえたところはあるが、大体に於て、矢張「遊蕩文学」の

失を多分に備えている。殊に氏の作品のあるものに至つては、如何なる点から見ても殆んど無意味に近いものがあつて、その製作衝動の果して那邊に存するやが疑われる場合もある。これは作家の心境に捕捉されたる芸術的境界の不確實を語るものであつて、旧「三田文学」の諸作家に通ずる一般的欠点である。

六

以上予の縷説するところによつて、所謂「遊蕩文学」

なるものが、芸術的にどれだけ無価値であり、無意義であるかは、大抵想察することが出来るであらう。しかも、この無価値であり、無意義である「遊蕩文学」が、直接間接に及ぼす悪影響に至っては、独り善芸術を滅ぼして、悪芸術を助長するがごとき文壇的傾向、——即ち、優秀なる文学及び文学者の成長発達を阻碍^{そがい}し、読者の芸術的自覚を低劣ならしめるごとき傾向を醸成する虞れがあるばかりでなく、更に他の一面に於いては、一般の世道人心に於ける頹廢と糜爛とを挑発して、人間の誠実なる精神生活を蠹毒^{とどく}し、健全なる倫理的意識を稀薄ならしめる

危険がすくなくない。況やかかる功利的見解は那邊に墮するにせよ、予は予の約束する芸術の理想よりして、絶対にかかる文学的傾向の存在を容認することは出来ない。何故なれば、予は自己をより善くし、より完きものにしようとする努力のもとにのみ、ほんとう真当の意味の芸術が生れて来ると信じている。而して、かくのごとごととき努力は、人生に対する真挚なる考察と、誠実なる態度と、素樸なる感激とに依つてのみはぐく瞬まれ、遍満せる倫理的意識に依つてのみ育て上げられる。——この事實は古来の大芸術を見てもすぐ分るだらう。

かような意味に於いて、予が最も熾烈しれつなる嫌悪の念を以て対するものは、云うまでもなく、前記「遊蕩文学」の諸作家である。予が個人として何等の恩怨をも有しない諸氏の作品に対し、毫も仮借なき批評を加えて顧みないものは、全くかかる信念に、憑依ひょういするからであって、更に率直なる予の感情を披瀝すれば、予の芸術に対する理想と諸氏のそれとは到底両立しないもの、従って、予は予の信念に忠ならんがため、またしかすることによって、予自身の誠実なる自己に生きんがために、あくまで諸氏の芸術に対して宣戦せざるを得ない。諸氏の芸術が

事もなく栄えることは、やが馳て予の芸術的理想が地に委いしたことを意味するものであつて、到底予の忍従する能わざるところである。されば予は予の一般芸術に対する批評の筆を棄てざる限り、あらゆる機会と、あらゆる方法とを尽して、かかる「遊蕩文学」の撲滅に専心する考えである。（大正五年八月「讀賣新聞」）

日本文学電子図書館

「遊蕩文學」の撲滅

著 者：赤木桁平

制作者：宮澤一郎

底 本：「芸術上の理想主義」
洛陽堂

大正5年10月10日 印刷

大正5年10月13日 発行

日本文学電子図書館